

吉川史料館たより

第63号
2017年
(平成29年)
6月22日
木曜日

展示品紹介

このたびは、広家自筆書状の二通を紹介いたします。



吉川広家書状 慶長5年9月12日

一通目

去月廿四日津城落去之儀付而、態飛脚、令祝着候、於于今者、趣具可有其間候間、不能申候、其以後濃州表へ打出之、去七日南宮山と申二陣執候、敵ハ樽井赤坂ニ有之事候、双方中間一里候、只今まで

ハ弥行無乗之候、追々可申遣候、其地番衆普請等無緩之由肝要候、諸事猶以不可油断候、従香又(香川春継)、山九(山縣春佳)可申候、謹言

九月十二日

(広家花押)

祖九右

(現代語訳)

先月二十四日、安濃津城の落城について飛脚からよく、祝着のことを詳しく聞いてください。言うまでもありません、その後、美濃(岐阜)へ出陣し、去る七日南宮山というところに陣を構えた。敵は樽井(美濃)赤坂にいます。双方の中間は一里です。只今まで動きはない、追々伝えます。その地の番衆は普請をぬかりないようにすることが肝要です。諸事、猶以て油断してはいけません。香川春継や山縣春佳より申します。謹言。

九月十二日

広家

祖九(祖式長好)

発行所

吉川史料館

山口県岩国市横山二丁目七一三

郵便番号 七四一-1008-1

電話番号 (0827) 41-1010

二通目



吉川広家書状 慶長5年9月12日

尚々、其元万之心持肝心まで候候、此状両人之外ハ拝見仕間敷候、まじく、追而申聞候、此表敵三万計陣取在之事候、味方人数ハはるばる多候、乍去、いかニもかたまり不申候、彼是以被申下さる子細共多候間、各心遣之此事候、内府も被出候よし申候、ぎふ、いぬ山被越候間、被出候事ハ此節にて候候、兎角大事まで候候、心持のため申遣候之、兩人少も他言候てハ不可然候候、爰元ハやかて可相聞之候、吉事まじく、

九月十二日

広家

祖九

佐九

(現代語訳)

追記します。敵陣は三万ばかりの兵がおり、味方の人数はこれよりはるかに多いです。しかしながら、味方が一丸となっておりません。あれこれ指示が多く、各々の心遣いをしてください。家康も戦陣に出られるということになります。岐阜、犬山を出発され、この地に出られること今のこの時です。とにかく、大事な時ですので、その心持ちでいてください。そして二人には、このことを他言しないでください。こちらの事はやがて耳に入れます。追伸、そちらでは万の心持ち肝心です。

九月十二日

広家

祖式長好
佐々木長綱

(解説)

この二通共は同じ日付のもので、吉川氏の家臣の祖式氏に伝来した文書類で、のちに吉川家へ納められました。慶長五年九月、祖式長好は、領内の普請(土木工事)を担当していました。この年の七月六日、広家は家康の

(続き)
会津平定の援軍として出雲を出発して
おり、国元を離れて二ヶ月以上経って
います。

まず、一通目ですが、広家が東軍側
の安濃津城攻めの勝利を祝賀としてい
ます。後に、広家はこの戦いに勝った
ものの味方の死傷者が多く、これから
西軍として戦う不安を感じていました。
(吉川家文書九一七号 吉川広家自筆
覚書案)

しかし、家臣へは西軍側であること
を示す為であったと思われず。そし
て南宮山に陣を移して敵(東軍側)の様
子を記しています。国元を離れていた
ためか米子城の普請について気にか
けています。

次に二通目について、兵の数は敵よ
り多いものの一丸となっていない様子
や家康の動きまで記され、そして内密
にと念を押しています。

九月十二日かなりの情報が入り、
広家は危機感を感じ、毛利家重臣の福
原広俊と相談し、その二日後に黒田長
政を介して家康側と忠誠を誓う起請文
(吉川家文書二四九号)を交わします。

その情報と考えられるのが、黒田如
水・長政父子の書状です。

如水は九月三日付に広家へ宛てて
次のように伝えていきます。(吉川家文書
一五五号黒田円清書状)

まず、申し入れます。内府(徳川家
康)が上方に進軍することが取り沙汰
されていますが、本当です。進軍先に
貴殿がおりますので、細心の注意が必

要と存じます。
貴殿がそれからはずれますように、
まずもつて分別が肝要です。上方の武
将らは、悉く家康に味方となると申し
ます。貴殿の儀が、第一とし、その為
にこの使者を遣わします。九州の方は、
静謐です。
どのような戦乱があるうとも、私の
ことは気遣いはしないでください。謹
んで申し上げます。

広家様
九月三日
円清



黒田円清(如水)書状 9月3日

そして、黒田長政が八月二十五日付

に広家に宛てた内容が次のとおりです。
(吉川家文書一四八号 黒田長政自筆
書状)

先日、書状にて申し入れましたが、
届きましたか。
とにかく、毛利輝元様の御家存続を考
えているのならば、分別が最も大事で
す。
どうか返事をください。謹んで申し上
げます。

尚以て、家康様も早く駿河府中まで進
軍されますこと、夜前に連絡がありま
した。以上。

八月二十五日
長政(花押)

広家様参る

人々御中



黒田長政自筆書状 8月25日

これは、縦八、九センチ、横十一、
三センチと小さな手紙で密書となりま
す。

長政は家康の軍のなかにおり、如水

は九州にいなから家康とつながって
いました。敵側の情報を内密に知り、西
軍の形勢不利を感じとったのです。そ
こで、毛利家存続のために家康との戦
いは避けた方が得策と結論つけたと考
えます。

ただし、毛利家領土安堵の確約は、
結果反古されましたので、広家への批
判は長く続きました。

毛利家は防長二ヶ国に減封されま
したが、広家は家康に対して感謝の気
持ちを持っていました。それは、広家
が息子宛てに記した四十八ヶ条の示訓
の三番目に

「一、両御所様(徳川家康と秀忠)の御
憐愍は浅からず、これは忘れるな。
一、萩御両三人様(毛利輝元、秀就、就
隆)へ奉公はぬかりのないように。
付 内儀についてはいうまでも
ない。」

とあります。そして、三十二番目にて、
黒田家に対し

「一、黒田長政殿と私の関係は、如水
様からの引き合いにより現在に至る。
今後も丁重にすることが大事。」と記し
ています。江戸時代を通じて岩国から
黒田家に対しての礼は尽しています。

示訓から受ける印象として、広家は、
徳川家康や黒田父子に恨みなどは感じ
られません。むしろ、家康や黒田長政
に恩義を感じています。広家にとつて
毛利家存続の恩人ではなかったのでは
ようか。

(原田史子)

歴史エッセイ



吉川広家画像 賛 江月宗玩筆

吉川広家画像の賛について、賛者は江月宗玩(こうげつそうがん)という名僧で江戸時代初期の三筆の一人です。宗玩は堺の豪商で茶人・津田宗及の二男として誕生。堺の南宗寺(なんしゅうじ)で笑嶺宗訴について得度。のちに春屋宗園に参じその法を嗣ぐ。慶長15年、大徳寺156世となる。黒田長政が父如水を弔うために建てた塔頭「龍光院」の住持となり、のち、長政の請により博多に下向し、崇福寺の住持となる。

賛の内容は次のとおりです

全光院殿(広家の法名前拾遺補闕四品中岩如兼居士の肖像なり

厥(それ)、子広正信士をして手を画工に借り、幻化之相を画かして、此の一燈(とう)を遠きより来たりて讚詞を徴す。之を喚ぶに作り妙にして、覚明之躰。則ち一語も着する処無し。然ると雖も恧麼すれば居士。生前余と相親しむ。矧へ(あまつさへ)復末後の底に到りて。子孫に遺言し、余の洛北の叢寺に石浮(ふと)を造立す。厥の志観るべし。是故二固辞するを得ず。拙後語を綴りて以て白を塞ぐ。威風を写し出し。霜天二満ち丹青欸(ほのか)也。子孫有り美を伝う。譽中国に馳せ氏族吉川と称す。身を日本に立て。勇を朝鮮に振う。孔明の図(はかりごと)を学び。陣は重郭。隗

より始む。賢にして忠に至る。其至徳謀あり。又権あり。武門の柱礎と為す。梵宮の祿単を輔く(たすく)。蚤(つと)に僧上位に参じ。吾が三玄を脱会す。八千功に就き十二因縁を觀る。厚仁露恩。洽く利を絶ち名を鎖す。纏りて(めぐりて)山を樂しみ。山岳を愛す。市に隠れて市鄙を遠ざく。胸宇に曇り点せず。眼界の月正円たり。腰間の三尺吹毛の劍。全く光輝くを放つ。大千を尽して普し(あまねし)。寛永第七歳。舍上章敦洋(しやじょうしようとんよう)前大徳現徳禅江月窈(よう)宗玩。夷則(いそく)念一日。龍光の室中にて書す。(寛永七年 七月二十一日)

〔『江月和尚と岩国』昭和61年11月16日 梶原熊展氏(岩国徴古館) 参照〕

要約すると「この画像は、広家の嫡男広正が絵師に描かせ、江月宗玩賛の依頼をしてきたとある。生前の姿が描かれている。広家とは生前より懇意にしており、子孫に私の洛北にある寺に石浮を造ってほしいと遺言した。」とあります。賛を記したのは、龍光院にて寛永七年のことと分かります。

さて、二人の関係は天正十六年頃からと推測されます。これは、広家が家督を継いだのちに、豊臣秀吉のもとへ毛利輝元と小早川隆景と共に饗宴を受けるために上洛した時期です。その後、広家は檀那として寺へ寄付をしています。

した。しかも、黒田如水長政父子との関わりもある宗玩との関係は広家没後にも続いていました。

広家の墓は、現在も龍光院にあります。非公開なので拝見することはできません。広家ゆかりの品として、龍光院に寄贈した盆石があります。元は尼子氏の所有のもので、南条氏、吉川氏と伝来したものです。

今後も宗玩と広家の関係を調べて分かったことがあればまた紹介します。(原田史子)

お知らせ

平成29年6月1日付をもって館長藤重豊が退任し、新たに吉川重幹が館長に、隅喜彦が館長代行に就任しましたのでお知らせします。今後共宜しくお願い申し上げます。

編集後記

▽今回は、お問い合わせの多い「吉川広家はなぜ関ヶ原の合戦で家康に内通したのか」に対して現在の見解を示したいと企画しました。(原)

吉川史料館
〒741-0081
山口県岩国市横山二丁目七之三
TEL 〇八二七・四一・一〇一〇
FAX 〇八二七・四一・三一〇〇

吉川広家の関ヶ原合戦展

期間・・・平成29年6月22日～9月18日

吉川史料館

番号	史料名	年月日		数量
○1	黒田如水自筆書状	慶長5年8月1日	吉川広家宛	1通
○2	徳川家康書状	慶長5年8月8日	黒田長政宛	1通
○3	黒田長政自筆書状	慶長5年8月17日	吉川広家宛	1通
○4	黒田長政自筆書状	慶長5年8月25日	吉川広家宛	1通
○5	井伊直政本多忠勝連署起請文写	慶長5年9月14日	福原広俊、吉川広家宛	1通
○6	黒田長政自筆起請文	慶長5年9月29日	吉川広家宛	1通
○7	黒田長政自筆書状	慶長5年11月	吉川広家宛	1通
○8	毛利輝元書状	慶長5年9月22日	福島正則、黒田長政宛	1通
○9	黒田如水書状	慶長5年8月4日	吉川広家宛	1通
○10	黒田円清(如水)書状	慶長5年9月3日	吉川広家宛	1通
○11	黒田円清書状	慶長5年10月4日	吉川広家宛	1通
○12	吉川広家自筆書状	慶長5年9月12日	祖式長好宛	1通
○13	吉川広家自筆書状	慶長5年9月12日	祖式長好、佐々木長綱宛	1通
14	短刀	室町時代	千手院作	1口
15	太刀 付属 糸巻太刀拵	鎌倉時代末期	備前国左兵衛尉源吉家作	1口
16	吉川広家画像	江戸時代初期	賛 江月宗玩筆	1幅
17	勝軍騎馬尊像	室町時代	毛利元就遺品	1個
18	鯨形兜	桃山時代	吉川広家所用	1鉢
19	三巴具足	桃山時代	吉川広家所用	1領
○20	吉川広家自筆覚書案	慶長5年9月		1通
○21	吉川広家自筆覚書案	慶長6年	毛利輝元宛	1通
○22	吉川広家自筆覚書	慶長19年11月11日		1通
○23	毛利輝元書状	慶長2年6月24日	吉川広家宛	1通
○24	吉川元春自筆書状	天正9年2月19日	吉川広家宛	1通
○25	前代人帳	元和3年	吉川佐介、吉見彦次郎宛	1折
26	吉川広家自筆示訓	元和3年5月3日	吉川佐介、吉見彦次郎宛	1折
○27	太平記	永禄6年～8年	吉川元春筆写	5冊
28	俳句・偈	江戸時代	(俳句)吉川広家、(偈)江月宗玩筆	1幅
29	芦屋(如水)釜	室町時代	黒田如水より贈与品	1個
30	千利休書状	天正16年	吉川広家宛	1幅
31	大肩衝茶入	明時代	豊臣秀吉から拝領品	1個
32	茶杓	桃山時代	千利休(宗易)作	2個
33	鹿図屏風	桃山時代	雲谷等顔筆	6曲1双
34	花鳥図屏風	桃山時代	伝 雲谷等顔筆	6曲1双

○…国指定重要文化財